

くのをやめましょう、ね。次の時間には教室に出ないでもよろしいから、私のこのお部屋にいらっしやい。静かにしてここにいらっしやい。私が教室から帰るまでここにいらっしやいよ。いい」と仰りながら僕を長椅子に坐らせて、その時また授業の鐘がなったので、机の上の書物を取り上げて、僕の方を見ていられましたが、二階の窓まで高く這い上った葡萄蔓から、一房の西洋葡萄をもぎって、しくしくと泣きつけていた僕の膝の上にそれをおいて、静かに部屋を出て行きなさいました。

45

一時がやがやとかましかった生徒達はみんな教室に入って、急にしんとするほどあたりが静かになりました。僕は淋しくって淋しくってしょうがない程悲しくなりました。あの位好きな先生を苦しめたかと思うと、僕は本当に悪いことをしてしまったと思いました。葡萄などはとても食べる気になれないで、いつまでも泣いていました。

50

ふと僕は肩を軽くゆすぶられて眼をさました。僕は先生の部屋でいつの間にか泣き寝入りをしていたと見えます。少し痩せて身長の高い先生は笑顔を見せて僕を見おろしていられました。僕は眠ったために気分がよくなって今までであったことは忘れてしまって、少し恥ずかしそうに笑いかえしながら、慌てて膝の上からすべり落ちそうになつていた葡萄の房をつまみ上げましたが、すぐ悲しいことを思い出して、笑いも何も引っ込んでしまいました。

55

「そんなに悲しい顔をしないでよろしい。もうみんなは帰ってしまいましたから、あなたもお帰りなさい。そして明日はどんなことがあっても学校に来なければいけませんよ。あなたの顔を見ないと私は悲しく思いますよ。きつとですよ。」

60

そういつて先生は僕のカバンの中にそつと葡萄の房を入れて下さいました。僕はいつものように海岸通りを、海を眺めたり船を眺めたり

しながら、つまらなく家に帰りました。そして葡萄をおいしく食べてしまいました。

65

※ 次の日が来ると僕は中々学校に行く気にはなれませんでした。お腹が痛くなればいいと思ったり、頭痛がすればいいと思ったりしたけれども、その日に限って虫歯一本痛みもしないのです。仕方なしにいやいやながら家は出ましたが、ぶらぶらと考えながら歩きました。どうしても学校の門を入ることは出来ないように思われたのです。けれども先生の別れの時の言葉を思い出すと、僕は先生の顔だけはなんといても見たくてしかたがありませんでした。僕が行かなかつたら先生は屹度悲しく思われるに違いない。もう一度先生のやさしい眼で見られたい。ただその一事があるばかりで僕は学校の門をくぐりました。

75

そうしたらどうでしょう、まず第一に待ち切っていたようにジムが飛んで来て、僕の手を握ってくれました。そして昨日のことなんか忘れてしまったように、親切に僕の手をひいて、どぎまぎしている僕を先生の部屋に連れて行くのです。僕はなんだか訳がわかりませんでした。学校に行ったらみんなが遠くの方から僕を見て「見る泥棒の嘘つき日本人が来た」とでも悪口をいうだろうと思っていたのに、こんな風にされると気味が悪い程でした。

80

二人の足音を聞きつけてか、先生はジムがノックしない前に戸を開けて下さいました。二人は部屋の中に入りました。

85

「ジム、あなたはいい子、よく私の言ったことがわかってくれましたね。ジムはもうあなたからあやまって貰わなくてもいいと言っています。二人は今からいいお友達になればそれでいいんです。二人とも上手に握手をなさい。」と先生はにこにこしながら僕達を向い合せました。僕はでも

6

あんまり勝手過ぎるようでもじもじしています